

## 村上勝人会員の急逝を悼む

村上勝人会員は、2000年5月10日、内臓の病のため、急逝された。享年53歳、気象庁気候情報課長の要職で、今後の更なるご活躍が期待されていただけに、誠に悲しく、残念でならない。

村上会員は、1946年愛媛県生まれ、1965年東京大学に入学され、理学部地球物理学科に進学、同大学院に進学された。1974年東京大学大型計算機センター助手を経て、気象庁気象研究所研究官、主任研究官、気候研究部室長、同企画室長を経て、1998年気象庁予報部システム運用室長、1999年4月、気象庁気候情報課長に就任されていた。私は今、在任が最も長く、大活躍されていた気象研時代の彼を思い出す。

「MONEX があろうとなかろうと、モンスーンの研究はやらねばならない私はやるつもりです。」まだどう見ても20台の顔にしか見えなかった村上さんからのきっぱりとした言葉であった。いつのどのような会合での発言であったか、今ではもう記憶にない。1979年にFGGE（第1次GARP全球大気実験計画）の一環として行われる予定のMONEX（モンスーン実験計画）に、日本がどう関わるべきかを話し合う気象学会の会合であったことは確かである。村上さんのこの発言を、まだ大学院生かあるいは助手に成りたてだった私は、非常に心強く、かつ感銘をもって聴いた。これが、私にとっての村上さんの第一印象でもあった。そして、初対面でこの発言を聞き、私はすっかり村上さんのファンになってしまった。

1976年にインドモンスーンの季節内変動（10～20日周期変動）についての美しい論文を発表された直後で、村上さんは、モンスーン研究に燃える新進気鋭の研究者であった。ケルビン波、混合ロスビー重力波、QBOの発見など、華々しく華麗な熱帯気象学にくらべ、当時の日本において、モンスーンの研究はまだ、アジア地域のローカルな気象現象の研究という印象を持たれていた時代である。村上さんは先年亡くなった新田（勲）さんとともに、クリシュナムルティ教授（フロリダ州立大）や村上多喜雄教授（ハワイ大）が進めていたMONEXを契機に、新たなモンスーン研究を行お



うと張り切っておられた。お二人は、インドでのMONEX観測に参加された唯一（二？）の日本人研究者となった。同じ頃、名古屋大学を中心とするヒマラヤでの観測プロジェクトに参加し、ネパールのモンスーン降水量変動の解析を細々とやりだしていた私にとって、村上さんの論文は、その内容も解析手法も、ことごとく新鮮であり、お手本そのものであった。以来、新田（勲）さんとともに、村上さんは、私のモンスーン研究にとって、無くてはならない存在となっていた。新田さんが若手のアドバイザーだとすると、村上さんはどちらかという兄弟子のような存在であった。以後、村上さんとは、良い意味で競うようにインドモンスーン、アジアモンスーンの変動、特に季節内変動の研究を進めた。その結果が評価され、1986年（昭和61年）の日本気象学会賞を二人で分かち合うことになったことは、今思い出しても嬉しく、懐かしい出来事であった。

村上さんは、飲むことには無上の価値観を置かれており、その点でも私とは同じ世界観（？）の間であるということ、よく気が合っていた。確か1982年の冬であった。当時、私は京大から筑波大への異動の話が決まっていた。たまたま気象研の村上さんの研究室を訪ねた時、「実は近々、筑波大に異動する予定で...」と切り出したとたん、我がことのように喜んでくださり、そのまま私を自宅に引き連れて、奥様ともども祝杯を挙げてくださった。村上さんの暖かいお人柄（と飲み好き）を感じた、今もって忘れがたい思い出のひ

とつである。その後、80年代から90年代にかけては、爆発的に発展した ENSO の研究に連動するかたちで、アジアモンスーンの研究も非常に活発になり、国際会議やワークショップもつぎつぎと開催されるようになった。私自身も、このような会議に出席する機会が増えていったが、どこに行っても、村上さんと飲んだ記憶が蘇ってくる。貿易風に椰子の木陰が揺れるハワイのビーチ、中国の古い都市杭州での湖畔の館、葡萄棚のあるウイーン郊外のワインレストラン、..... どのようなくだけた場所でも Y シャツをきっちりとして、パイプたばこをくゆらせながら、楽しそうに、うまそうに酒を飲む村上さんの姿は、それぞれの会議の情景の一部として、私の心に焼き付いている。

研究プロジェクトの推進やマネジメントでも、村上さんは抜群の能力を発揮されていた。科学技術庁の予算で気象研究所が中心になって行った「アジアモンスーン機構」の研究では、国際的なモンスーン研究者としての高い評価を背景に、中国やインドの研究者との研究協力や共同研究の交渉に卓抜した手腕を振るっておられた。実質的な事務局長としての彼の努力なくしては、10年間にもわたるこのプロジェクトの継続と成功はなかったと私は確信している。彼のこのような研究プロジェクト推進における天賦ともいえる能力の発揮は、科学的研究とは常に国際的に共有な文化活動であるべきだという彼の高い見識と価値観にもとづいていることを、私は折にふれ感じていた。彼は敬虔なカトリック教徒であったが、会議や飲む席で、そのことを感じたことはまったくなかった。しかし、今にして思えば、クリスチャンとしての彼の道徳観と、科学

的研究に対するこのような態度は、多分どこかで通じていたのではないか。残念ながら、そのことを彼にきく機会は失われてしまった。

その後、私たちが立ち上げ、今も引き続けている国際共同プロジェクト GAME (アジアモンスーンエネルギー・水循環研究観測計画) でも、村上さんの役割は非常に大きかった。気象庁・気象研究所の GAME への参加には、村上さんの企画・実行力、そして庁内での働きなくしては実現しなかったと私は信じている。自分の研究を熱心に行う研究者は多いが、ある意味では当然である。しかし、世界のために進んでデータセットを作ろうという研究者は非常に少ない。特に日本はこの意味での世界への発信・貢献が非常に遅れていると言わざるをえない。その中であって、村上さんは、貴重な存在であった。GAME で得られたデータを、どのように世界に公表し、発信すべきか。1996年、タイのパタヤで開かれた第2回 GAME 国際会議で彼が発表した GAME のデータセット作成と公開・配布に関する原則と枠組みは、彼の見識と構想力なくしてはありえない、すばらしいものであった。GAME のデータ公開に関する原則と方式は、この村上案にもとづいて、今、実行されようとしている。

このような国際的視野と広い見識をもった村上さんが、気象庁気候情報課長として、いよいよその実力を発揮してくださいと、私は大いなる期待に胸を膨らませていた矢先だった。悔しくて、残念でならない。20数年間のおつき合いに深く感謝するとともに、謹んでご冥福をお祈りする次第である。

(筑波大学地球科学系教授 安成哲三)